# 没理想論争注釈稿（四）

坂井　健

（前号よりの続き）

若し没理想を説く人のいへるが如く、言葉のうちにおのが理想のあらはれざる戯曲に長ずるためにシエクスピイヤ大なり、おのが理想のあらはるゝ叙情詩若しくは小説に長ずるためにバイロン、スキフト小なりといはゞ、これシエクスピイヤとバイロンとスキフトとたま〳〵其詩体を殊にせしために大小の別生じたるのみにて、その本来の才分境地には大小なかるべし。[1]そが上に戯曲に理想あらはれず、叙情詩若しくは小説にあらはるといふは、戯曲にあらはるゝ客観の相（所観）は叙情詩若しくは小説に於けるより多く、叙情詩若しくは小説にあらはるゝ主観の感は戯曲に於けるより多きがためにしかおもはるゝのみにして、其実は戯曲にも、叙情詩若しくは小説にも、作者の理想、作者の極致はあらはるゝなり。[2]唯其理想は抽象によりて生じ、摸型にしたがひてあらはるゝ古理想家の類想にあらずして、結象して生じ、無意識の辺より躍り出づる個想なり、小天地想なり。[3]大詩人の神の如く、聖人の如く、至人の如くおもはるゝは理想なきがためならず、その理想の個想なるためなり、小天地想なるためなり。[4]太虚の無意識中より意識界に取り継がれずして生れたる造化と、おなじ無意識中より作者（シエクスピイヤ）の意識界を経て生れ出でし詩（戯曲）と相似たるに何の不思議かあらむ。[5]唯無意識中よりの神来には真の大詩人ならでは多く逢はず。是を以てシエイクスピイヤが戯曲古今に独歩す。されば、バイロン、スキフト

のともがら、たとひ多く戯曲を作りぬとも、シエクスピイヤにおなじき境地には至らざるべく、近松は戯曲を作りけれども、その客観相をあらはしたる中に類想に近きところあれば到底シエクスピイヤには及ばざるべし。(6)「キング、リヤア」は戯曲にして、作者みづからが評論なしといへども、勧懲の旨ありと見れば、しか見ても可なり。(7)勧懲の劇を作らむとして、いたづらに人物をならべ、脚色を立てたるをこそ卑みもすべけれ、曲中人物の性格一々に活動せる小天地想の作をば勧懲の旨ありとて斥くるものあらむをや。蕞六夫婦が事に小天地想あらはれたらば、作者の詞に勧懲の旨ありとて、何ぞ病とするに足らむ。(8)

（1）**おのが理想のあらはれざる戯曲に長ずるために……その本来の才分境地には大小なかるべし。**・逍遥が「恐らくはシェークスピヤと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉しくいへば、小説の体にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし。其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり。」（『マクベス評釈』の緒言」）といったのを受けて、前の「シエクスピイヤがバイロン、スキフトより大なるは彼は理想なく、此はおのが理想をあらはせばなり。『ドラマ』の小説より完きは、彼は理想なく、此は作者の理想を含みたればなり。」という鷗外による逍遥の論の要約を繰り返しつつ、逍遥の、作品の優劣はジャンルに由来すると取られ兼ねない発言を非難したもの。鷗外の批判は、①バイロン、スキフトは、シェークスピアより劣っている。②その理由は、戯曲というジャンルによらなかったからだ。と逍遥の発言を規定することによって成り立っている。これに対し、逍遥は、「先生はわれを難じて、理想のあらはれざる戯曲に長ずるために、シェークスピヤを大といひ、理想のあらはるゝ叙事詩もしくは小説に長ずるために、バイロン、スキフトを小なりといへり、といはれたれど、これはた此方の覚悟せぬ所なり。」（『烏有先生に答ふ』明治二五・二）と①を否定する形で反論している。先述した「『マクベス評釈』の緒言」の逍遥の文脈は、たしかに②の解釈を許すから、逍遥としては、①を否定するしかなかったわけで、苦しい言い訳ではある。逍遥の発言は、たしかに不用意なものだけれども、シェークスピアの戯曲の注解である『マクベス評釈』の「緒言」という場でなされたものであって、鷗外のような論難は予定もしなかったことであったに違いない。鷗外の揚げ足取りの気味がないではない。

（2）**戯曲に理想あらはれず、叙情詩若しくは小説にあらはるといふは、……其実は戯曲にも、叙情詩若しくは小説にも、作者の理想、作者の極致はあらはるゝなり。**・逍遥の「『キング・リーヤ』の悲劇は、馬琴の作に似て、勧懲

の旨いといちじるしく見えけれども、作者みづからが評論の詞絶えて篇中に無きが故に、見るもの、理想次第にて、強ち勧懲の作と見做す事を要せず。別に解釈を加ふること自在なり。」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）という発言を受けている。逍遥の言は、叙情詩は、作者の気持ちを歌うものであり、小説は、人物や景物を描写するにしても、地の文に登場人物の行ないなどについての作者の評価が入り易い。その点、戯曲の場合、地の文は存在しない訳だから、作者の主観は入りにくい、という極めて一般の耳目に入り易いものである。たしかにそういった傾向性はなくもないだろうが、それはあくまで相対的なものに過ぎず、確かに逍遥の失言ではある。たとえば、小説でも、作意が露骨に現われていないものもあるだろうし、戯曲形式にしても、登場人物が筋書きの中での必然性もなしに、作意の露骨に現われた言動を行なえば、作者の意見は現われるのである。だが、「シエークスピヤ脚本評註緒言」は、あくまでも入門書の性格を持っていたことを勘案しなければならない。逍遥は、「新作十二番のうち既発四番合評」（明治二三・十二）の中で「傑作のドラマを読めば吾人悦として因果の理を見、雑然紛然たる人間寰に一定の理法の流行することを瞑悟す」と述べており、戯曲にも「理想」が現われていると考えていたことは明らかである。

なお、「客観の相」、「主観の感」について鷗外は、「叙情詩にては、主観の情、客観の相に勝ち、叙事詩にては、客観の相、主観の情に勝ちたれども、戯曲に至りては、情と相との平均を取戻さんとす。」（「逍遥子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及梓神子」明治二四・九）としている。これは、ハルトマンの『美の哲学』を引いたもので、「主観の情」の原語は subjektive Gefühl（主観的感情）、「客観の相」は objektive Anschauung（客観的観察）。

（3）**唯其理想は抽象によりて生じ、摸型にしたがひてあらはる、古理想家の類想にあらずして、結象して生じ、無意識の辺より躍り出づる個想なり、小天地想なり。**・鷗外は、「花に譬へていはゞ、類想家の作も個想家の作も、おなじ桜なるべけれど、かなたは日蔭に咲きて、色香少く、こなたは『インスピラチオン』の朝日をうけて、匂い常ならぬ花の如しとやいふべからむ。」（「逍遥子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及梓神子」明治二四・九）、「所謂神来即是なり。真の美術家の制作は無意識の辺より来る。」（「早稲田文学の没理想」）と述べる。なお、「類想」については、「ハルトマンは類想を卑みて個想を貴みたり。」、「類想の卑きは摸型に尽くる期ありといひしハルトマンが言を見ても知るべからむ。」（「逍遥子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集梓神子」）とある。

（4）**大詩人の神の如く、聖人の如く、至人の如くおもはる、は理想なきがためならず、その理想の個想たるためなり、**

**小天地想たるためなり。**・初出では、直後に「（山房論文其一）」とある。「逍遥子の新作十二番中既発四番合評、梅花詩集評及梓神子」には、これと直接対応する箇所はないが、ゲーテ、シェークスピアには真の「個想」が現われており、「小天地派」であるとしている。「個想」は活きた個性を備えた想であり（「逍遥子活きたる観念ありといひ、「インヂヰヂユアリチイ」ありといふ。是れハルトマンが此処の活物の意を取りて個想と名づけたるものにあらずしてなにぞや」（同前））、「小天地想」とは、「個物の能く一天地をなして、大千世界と相呼応する」（同前）ものである。

（5）**太虚の無意識中より意識界に取り継がれずして生れたる造化と、おなじ無意識中より作者（シエクスピイヤ）の意識界を経て生れ出でし詩（戯曲）と相似たるに何の不思議かあらむ。**・作者が文学作品を創造する営なみを、ハルトマンの仮想する世界の根源たる「無意識者」、即ち造物主が天地を創造する営なみとのアナロジーで捉えたもの。天才が創造する際に「無意識の辺より」「個想」が躍り出るとすれば、宇宙も文学作品も「無意識者」に由来するはずだから、似ているのは当り前だという理屈。

（6）**近松は戯曲を作りけれども、その客観相をあらはしたる中に類想に近きところあれば到底シエイクスピイヤには及ばざるべし。**・ただし、逍遥は「嘗て近松の世話物を取りて、をさ〳〵先輩の批評法に倣ひて、分析解剖を試みしに『天の網島』、『油地獄』さては『恋飛脚』、『伊達染手綱』など、いづれも予が小理想を包容して余れる所尚ほ綽々たり。」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）と述べている。

（7）**「キング、リヤア」は戯曲にして、作者みづからが評論なしといへども、勧懲の旨ありと見ば、しか見ても可なり。**・リヤ王を甘言を用いて欺いた奸臣が誅されることをもって、勧懲といったのだろう。ただし、リヤ王は、そのような仕打ちを受けてもやむを得ない暴君としても描かれており、それ故にこそ「強ち勧懲の作と見るを要せず。」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）ということになる。

（8）**蟇六夫婦が事に小天地想あらはれたらば、作者の詞に勧懲の旨ありとて、何ぞ病とするに足らむ。**・作者の批判があっても、人物自体が自然に活動していれば、構わない、という考え方。

英吉利古今の文士戯曲を作りしもの幾百千家ぞ。その作りし戯曲幾千万篇ぞ。この幾千万篇か知れぬ戯曲は、戯曲の体裁として作者自らが評論の詞をば挿まざりしならん(1)、皆所謂没理想なりしならん。さるに彼数百千家はその名、骨と与に朽ちぬ。ひとりシエクスピイヤが威霊今にいたるまでもいやちこ(2)なるは何故ぞ。彼数百家は小

家数にして、ひとりシエクスピイヤの大詩人たるは何故ぞ。又叙情詩と小説とには、作者の理想あらはるといひ、没理想に至ること能はずといはゞ、叙情詩に長ずる大詩人、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか。[3] 又叙事詩の旨は純粋なる客観相にあれば、其没理想に至り易きこと廻に戯曲の上にあらむに、没理想を説く人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ。[4] おほよそ是等の問に答ふる人なき間は、シエクスピイヤに理想なしともいはせず、理想なきを大詩人の本相なりともいはせじと、烏有先生は説けりとぞ。

（1）**この幾千万篇か知れぬ戯曲は、戯曲の体裁として作者自らが評論の詞を挿まざりしならん**・先の（1）と同様、逍遥の「恐らくはシエークスピヤと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉しくいへば、小説の体にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし。其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり。」という発言を受けて、作品の優劣はジャンルによるものではなく、同じジャンルの中でも作品に優劣があることを言ったもの。

（2）**いやちこ**・きわだっている。

（3）**又叙情詩と小説とには、作者の理想あらはるといひ、没理想に至ること能はずといはゞ、叙情詩に長ずる大詩人、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか。**・逍遥は、「今大小を混じて例を挙げバ、前者（坂井註・叙情詩人）ハ、ダンテの如くマアロウの如くミルトンの如くカーライルの如くバイロンの如くウヲーヅヲースの如くブラウニングの如く後者ハホーマルの如くシエークスピヤの如くギヨーテの如くスコツトの如くエリオツトの如し要するに理想派の諸作にハ作者の極致とする所躍然として毎に飛動し造化派の傑作にハ作者の影全く空し叙情詩人の大なるハ猶雲に沖る高嶽のごとく弥々高うして弥々著しく世相詩人の大なるハ猶辺無き蒼海のごとく弥々大にして弥々茫々たり前者ハ猶万里の長堤のごとし遠うして更に遠しといふとも詮ずるに踏破しがたきにあらず後者ハ猶底知らぬ湖の如し深うして更に深く終に其底を究む可らず是を二者相違の要点とす。」（「梅花詩集を読みて」明治二四・三）といっているわけで、決して鷗外の批判するような考えでなかったことは明白で（ただし、「後者ハ猶底知らぬ湖の如し深うして更に深く終に其底を究む可らず」とあるように、世相派の方を上位に置いていたようである。）、逍遥も後に「烏有先生に答ふ」（明治二五・二）で、この箇所を引いて反論している。

（4）**又叙事詩の旨は純粋なる客観相にあれば、其没理想に至り易きこと㊂に戯曲の上にあらむに、没理想を説く人の戯**

**曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ。**・鷗外は「逍遥子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及梓神子」において、ハルトマンは、叙情詩は客観の相、叙事詩は主観の情にそれぞれ特質があるとした上で、別に戯曲を立て、「戯曲に至りては、情と相との平均を取戻さむ」としている、としており、これに従えば、叙事詩の方が戯曲より純粋に客観的ということになる。

われ山房にありて興来れば文を論ず。この頃逍遥子が言を聞いて実を記することの功徳を知り、また烏有先生が言を聞いて理を談ずることの利益を覚りぬ。逍遥子が実を記するはよしと雖、その記実によりて談理を廃せむとするはあしかりなん。[1] 烏有先生が理を談ずるは弁を好むに似たれども、その記実にあかず思へるは無理ならじ。逍遥子は早稲田に隠れて記実の直筆を揮へ。われは且らく烏有先生に代りて、山房に居て文を論ぜむ。[2]

（1）**その記実によりて談理を廃せむとするはあしかりなん。**・逍遥が排撃したのは、「小理想」（狭い視野）からなされる「談理」（議論）であって、決して「談理」そのものを排したわけではない。「先生が談理を重んずべしといふや、毎に絶対の意味にて謂ふか。即ち、古今東西の大いなる談理家を、哲学者といふ際をも、そが眼中に置きて謂へるならん。是れ理といふ字を絶対の義に解したるなり。我が後にせんといふ談理は然らず。方今新聞、雑誌などに散見するなる、かたよりたる小議論を指せるなり。其の根底に、一系の定まれる哲学も無うして、一時の感の浮かべる侭に、或ひは好悪に駆られて、衆他を排し、或ひは狭隘の経験を尺度として、大いなる人間を是非するが如き頑陋偏僻の小理想を謂へるなり。」（「烏有先生に答ふ」）と後に反論する所以である。

（2）**逍遥子は早稲田に隠れて記実の直筆を揮へ。われは且らく烏有先生に代りて、山房に居て文を論ぜむ。**・初出では、この箇所に強調を示す二重丸の傍点が附されている。

附記、其言を取らず[1]

主観の情を卑みて、客観の相を尊む。是に於て乎、今の叙事詩すくなき世にありては戯曲をして第一位に居らしめざることあたはざるべし。[2] これを早稲田文学が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没主観なればなり。[3]

俄羅西の人ツルゲニエフ小説喧嘩買 Bretojör を著す。[1] 独逸の人ヰルヘルム、ランゲが其文を読みて作者が喧嘩買を悪みながらも敢て一貶辞を挿まざるを称へて止まず。馬琴が筆力、能く蟇六を写せるに、猶評を叙事の間に挿むことを免れざりしは、婦幼のために書を著すといふ志の卑きがためなり。早稲田文学が八犬伝にあきたらざる所ありとするは、豈馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。[2] われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没挿評なればなり。

（1）**附記、其言を取らず**・初出『しがらみ草紙』二七号では、「山房論文其七附録　其言を取らず」として掲載。逍遥が没理想を説くべく挙げた例証について、それぞれに対する逍遥の評価そのものは認めながらも、それを「没理想」という概念で解釈することを否定したもの。要旨は、末尾の「われは早稲田文学と共に戯曲を嗜み、早稲田文学と共に叙事中に評を挿まざる小説を愛し、早稲田文学と共に造化に似たる詩を好み、早稲田文学と共に悟を貴む。然れどもわれは早稲田文学と共に没理想を説かず。」に尽きる。

（2）**主観の情を卑みて、客観の相を尊む。是に於て乎、今の叙事詩すくなき世にありては戯曲をして第一位に居らしめざることあたはざるべし。**・前述したように、鷗外は、ハルトマンを引いて、叙情詩は「主観の情」、叙事詩は「客観の相」を特質とし、戯曲は両者の融合であると説いている。逍遥が没理想によって、「客観の相」を重視する以上、「叙事詩」こそ逍遥の最も求めるジャンルであるはずだが、叙事詩が少ない現在では、「客観の相」の幾分でも現われた次善のものとして、戯曲を推さざるを得なかったのだろう、という論理。これは鷗外のやや勝手ともいえる決めつけで、逍遥は、決して純粋な客観的描写のみを求めていた訳ではない。これに対する逍遥の反論は、「先生また叙事詩の旨の純粋なる客観相たることをいひて、わが叙事詩的没理想を取らざる由縁を怪しまれき。是れもまた先生が、わが好尚する唯一点をば没理想なり、と想はれたるより生じたる誤解ならん。」（「烏有先生に答ふ」）というもの。なお、ここでの「没理想」は、鷗外が解釈していたところの「没理想」（無理想）を指すととるべきだろう。逍遥の意図した「没理想」（隠れて見えない理想、つまり、有理想）であるとするなら、理想がはっきり現われているものでも構わないのだということになり、論理が乱れるからである。

（3）**これを早稲田文学が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没主観なればなり。**・逍遥は、作者のものの考え方が露骨に現われにくいことを、戯曲という形式の特

長とした。だとすれば、逍遥のいう「没理想」は、作者の考え方が現われないということに過ぎない、という論理。

（4）**俄羅西の人ツルゲニエフ小説喧嘩貢 Bretojor を著す。**・Bretojor は **бретёр**、決闘好きの意。ただし、筆者未見。

（5）**早稲田文学が八犬伝にあきたらざる所ありとするは、豈馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。**・「曲亭の作を見れば、例へば、蟇六夫婦の性格の如き、頗る自然に肖て活動したれども、吾人はこを没理想とは評せずして、勧懲の旨に成れりといふ。作者が叙事の間に然いへればなり。」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）を受ける。

シエクスピイヤは大詩人なり。その作の造化に似たるは、曲中の一々無意識界より生れいでゝ、おの〳〵その個想を具へたればなり。[1] その作の自然に似たるは、作者の才、様に依りて胡盧を画く世の類理想家[2]に立ち超えたりければなり。早稲田文学はこれに縁りて、シエクスピイヤを没理想なりとす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没類想なればなり。

（1）**その作の造化に似たるは、曲中の一々無意識界より生れいでゝ、おの〳〵その個想を具へたればなり**・「無意識界」は根源的世界。「個想」は、活きた個性を備えた想（イデー）。それぞれ、前出。ただし、「無意識界」については、前稿「没理想論争注釈稿（三）」（『文芸言語研究　文芸篇』二三号、一九九三・三）参照。イデーについては、やや下るが、鷗外は、高瀬文淵が「現象の裏面には、必ず事物本体の構成したる図式あるべく、その形体の摸型となれる図式は、事物本体が意中に於いて予め構成したる形象なれば、予は言換へて意象といふべし。」とし、「この意象といへるものゝ現象世界の裏面に潜み、まず予め図式となりて内に存するものなることを実地に知らむと欲せば、宜しく蜘蛛の巣に就て其消息を悟るべし。」（『新文壇』一号、明治二九・一）と蜘蛛の営巣に例えて「意象」を説明したのに対し、『めさまし草』二号（明治二九・二）で、これは「観念」あるいは「理想」と訳されている「イデエ」だから、「意象」などという無用の造語をする必要はない、とたしなめており、造物主が万物の創造に先立って描いた設計図であり、現象世界の本質として、考えていたことが分かる。

（2）**様に依りて胡盧を画く世の類理想家**・「胡盧」は夕顔。様式にしたがって、類型的に描く俳画などを念頭において、「類想」一般を批判したものか。

虚心になりて世界を見よ。そこに哲学あらむ。平気になりて文学の現勢を見よ。そこに評論あらむ。[1]悟は大道なり。学は迂路なり。まことや成心[2]は悟の道の稲麻竹葦にして、学の路の荊棘なれば、誰かはこれを破り、これを除かむことを欲せざらむ。[3]然りとて理を談ずるを聞くことだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯実を記したるのみを見て悟れといはむは、おそらくは難題ならむ。[4]早稲田文学が文壇の牛耳をとりて大道を説くは善し。われ豈其意を取らざらむや。されど其言は則ちわが取らざる所なり。故いかにといふに、早稲田文学は読者の没理想を命にして言を立つといへど、[5]所謂没理想は没理想にあらずして、没成心なればなり。

(1) **虚心になりて世界を見よ。そこに哲学あらむ。平気になりて文学の現勢を見よ。そこに評論あらむ。**・「虚心になりて世界を見よ」、「平気になりて文学の現勢を見よ」ともに逍遥のかねてからの主張を引きつつ、「哲学あらむ」、「評論あらむ」と、逍遥とは逆の結論を引き出しているわけで、痛烈な皮肉である。

(2) **成心**・先入観、偏見のこと。

(3) **まことや成心は悟の道の稲麻竹葦にして、学の路の荊棘なれば、誰かはこれを破り、これを除かむことを欲せざらむ。**・初出では、直後に「(柵草紙第一号、草紙の本領)」の注がある。これは、「余等は詩学の運用を妨ぐるものを求めて偏聴と成心とを得たり」(「『しがらみ草紙』の本領を論ず」『しがらみ草紙』一号、明治二二・一〇)を受けると思われる。

(4) **理を談ずるを聞くことだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯実を記したるのみを見て悟れといはむは、おそらくは難題ならむ。**・逍遥の「読者よ、時文評論の第何十頁に明治文学の活機が現れたるかと詰問することを休めよ。活機の在否は我が評論の紙上にあらずして汝が公平なる眼中にあるべし。「時文評論」の第何篇に、明治文学大帰一、大調和の策あるぞと問ふこと勿れ。其の大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ。」(「我れにあらずして汝にあり」明治二四・一一)という発言を受ける。(「没理想論争注釈稿(二)」『文芸言語研究　文芸篇』二二号)参照。

(5) **早稲田文学は読者の没理想を命にして言を立つといへど**・(4)で引いた「我れにあらずして汝にあり」の逍遥の発言を受ける。

われは早稲田文学と共に戯曲を嗜み、早稲田文学と共に叙事中に評を挿まざる小説を愛し、早稲田文学と共に造化に似たる詩を好み、早稲田文学と共に悟を貴む。然れどもわれは早稲田文学と共に没理想を説かず。烏有先生既に没理想を一主義として弁じたれば、われは唯わが没理想といふ語を取らざる所以を言ふ。(1)

（1）**烏有先生既に没理想を一主義として弁じたれば、われは唯わが没理想といふ語を取らざる所以を言ふ。**・初出「われは唯柵草紙の没理想といふ語を取らざる所以を言ふ」の部分に傍点。「烏有先生」は、「理想」（イデー）の実在を説いた（「烏有先生既に理想界を観、無意識界を観て、美の理想（Idee）ありといひ、又これに適へる極致（Ideal）ありといへり。」）。したがって、「没理想」すなわち「理想」が存在しないという逍遥の主張（ただし、この時点での鷗外の理解。実は、「没理想」は「無理想」ではなく、隠れて見えない「理想」の意であることが、「没理想の語義を弁ず」（明治二五・一）で明かされる。）は相対化され、一つの主義に過ぎなくなっている。ここで鷗外は、はっきりと「烏有先生」と同一の立場であると言明することを避け、「没理想」という術語自体が持つ多義性とその弊害を指摘するにとどめている。このため、後に逍遥が「（第一）先生は、先天の想といふもの宇宙にみちゝたり、と信じ、われはこれを断ずること能はず。／（第二）先生は、戯曲家の理想は結象して無意識の辺より躍りいづる個想なり、と信じ、われはこれを解する能はず。」（「烏有先生に答ふ」）として、「無意識の精霊」が現象世界に現われた目的は何かと問い詰めた際、「逍遥子はわれを以て烏有先生なりとし、われを以てすでに大理想を得たるものとし、われを以て胸に一系の哲理あるものとして、賛嘆至らざるところなし。烏呼、是れその真心なるか。／われは烏有先生にあらず。」「ハルトマンの烏有先生これを聞かば、唯わが無意識の哲学を読めといはむ。」（「逍遥子と烏有先生と」）とはぐらかすことが可能になっている。巧妙（正直？）な論法である。

## 烏有先生に謝す(1)

『しがらみ艸紙』に烏有先生といふあり。精厳なる審美眼を開いて、逍遥子が没理想の説を読破し、縦横弁折して是非を決せり。議論高遠、理到り、筆到れり。何者か先生が深覈(2)に服せざらん。逍遥子三読して自家が非を覚ること一二のみならず。就中、その用語例の浪にして、我れひとり解し、他人をして解せしむる能はざりしことを覚れり(3)。又その論の理に基かずして情に由来する所多般なりしことを覚れり。はた其論の散漫にして、其弁の粗砕なりしことを覚り、且つ其議論の兎角に現在の情勢に拘らひて、純理の門に達することあたはざりしを覚れり(4)。そのシエークスピヤを評して没理想なりといふや、シエークスピヤの全局を評してしかいひたるにはあらず、シエークスピヤを評するに小理想の解釈の無用なる由を弁じたり(5)しなれど、弁と理と双つながら到らざりしが故に、先生看て全局の評となせり。而して逍遥子これを否拒すべき詞を知らず。先生の駁論は論理の自然なればなり。夫の記実を重んずべきことを論じて、談理の後にすべきをいふや、談理を斥けんとしてしかいひたるにはあらず、『早稲田文学』一二冊の中に時文の活機勢を看出ださんと望むもの(6)の極めて謬妄なるを弁ずると同時に、世の小理想を是れよろこび毫も他を顧みざるものを難ぜしのみ(7)。逍遥子不敏なりと雖も、軽々しく実と理との優劣を断定せんや。そが没理想とは即ち有大理想の謂ひ(8)にして、そが没理想を唱ふるは、その大理想を求めかねたる絶体絶命の方便なり(9)。有無の境に迷ひて、有は即ち無、無は即ち有と観じつゝ、無神主義のユニテリヤンと化し去らんとせるなり(10)。所詮、逍遥子が没理想は方便のみ、目的にあらず(11)。彼れは一切空と観じたるにもあらず、本来虚無と観じたるにもあらず(12)。

(1) **烏有先生に謝す**・鷗外「早稲田文学の没理想」(明治二四・一二)への最初の逍遥の反応。内容的に見て、次の「没理想の語義を弁ず」の先触れとして位置付けられる。『早稲田文学』第七号(明治二五・一・一五)の「時文評論」

欄に掲げられた。

（2）**深叡**・深い考え。

（3）**その用語例の浪にして、我れひとり解し、他人をして解せしむる能はざりしことを覚れり。**・鷗外が、「没理想」を「没主観」、「没挿評」、「没類想」、「没成心」の意で使っていると批判した（「早稲田文学の没理想」）のを受ける。

（4）**其議論の兎角に現在の情勢に拘らひて、純理の門に達することあたはざりしを覚れり**・先入観や好悪に左右される、偏った評論のまかり通っていた当時の文壇の情勢を批判するために、没理想を唱えたのだが、そのための思いが先に立って、理論がおろそかになってしまっていたことを覚った、という反省。

（5）**シエークスピヤを評するに小理想の解釈の無用なる由を弁じたりし**・「予は没理想の作を理想もて評釈することのいといと要なかるべきを信ずる」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）とある。

（6）**『早稲田文学』一二冊の中に時文の活機勢を看出だされんと望むもの**・明治二四年一〇月二八日『国会』の斎籐緑雨、及び一一月一日『読売新聞』の石橋思案の発言をさすと思われる。「没理想論総注釈稿（二）」参照。

（7）**世の小理想を是れよろこび毫も他を顧みざるものを難ぜしのみ。**・「常識無き小理想家の多きほど厄介なるものはなし。実際の事に疎き空論家の増加するは、文学の為にも憂ふべくして喜ぶべきことにあらず。方今の文壇を観るに、我が方寸の小宇宙にのみ彷徨して、方十里内の実際をだにも全く知らざるが如き人少なからず。さる人々は、我が思ふ所のみを正しとして、他の謂ふ所を悉く斥け、そが小理想を尺度として、此の大世界の事をも裁断せんと企つるなり。偏見家、小理想家などといふもの是れなり。」（「我れにあらずして汝にあり」）とある。

（8）**没理想とは即ち有大理想の謂ひ**・「没理想の語義を弁ず」（『早稲田文学』八号、明治二五・一）にも、「造化は（今人の智の及ぶ限りにていへば）無辺また無底なり。此の無辺無底のもの、これを名づけて何と呼ばん。大なる心と名づけんか。神存すといふにひとしからん。然れども我れ頑愚未だ神存すと信ずることを得ず。これを名づけて大理想といはんか。我れ不学、未だ其の大理想とは如何なるものなるか證することを得ず。此に於いてか、右に角あり、左に角あり。仮に名づけて没理想といふ。」とあり、実は、逍遥は、理想の存在を前提としていたことが分かる。後に鷗外に「逍遥子は既に没却理想を立てたれば、これも既得大理想といふべきものにはあらざるか。」（「逍遥子と烏有先生と」明治二五・三）とされる所以である。なお、巌本善治は、「シエクスピアが理想は最と大きやかなりし、故に没理想なりしと云ふものあり。之より延いて様々の誤解を為すもの多きこそ痛ましけれ。」（『女学雑誌』二九〇号、明治二四・一一）と述べ、内田魯庵は、「没理想――極めて好文字なり、然れども春廼屋は没理想なる

理想を立つるもの、是れ或は真理に近きかを知らざれども、遽に同意するを得ざるなり。」（『国民新聞』明治二四・一〇・一五）と述べ、それぞれ没理想といっても、実際は、有理想であることを看破している。

（9）**そが没理想を唱ふるは、その大理想を求めかねたる絶体絶命の方便なり。**「如何にせば此の無限無底の絶対に達すべきぞ。曰はく、我れを去つて我れを立てん。一理想を棄てゝ没理想を理想とし、一理想を固執する欲有限の我を去つて、無限の絶対に達せんとする欲無限の我を立てん。その方便は如何。答ふらく、没理想と。」（「没理想の語義を弁ず」）逍遥のこの言は、二葉亭の考え方を下敷きにしていると考えるとよく理解できる。つまり、「真理」は存在するに違いない。けれども、有限の人智によっては、無限の「真理」は、摑むことはできないだろう。だが、釈迦は「無上智」を得ていたという。これはどういうことであろうか。釈迦とても人間である。とすれば、その智も有限であったに違いない。にもかかわらず、「無上智」を得ていたとすれば、それは有限の現象世界に対する執着である「念」を去って、無限の「真理」と一体化したからに他ならぬ。即ち悟りを開いたからではなかったか。二葉亭はこのように考えた。（拙稿「二葉亭四迷「真理」の変容――仏教への傾倒――」『新潟大学国語国文学会誌』三二号、平成元・三、参照）つまり、「真理」を求めかねて、「念」を捨て、「真理」と一体化しようとした二葉亭の姿勢は、「大理想」を求めかねて、「小理想」を捨て、「没理想」と一体化しようとした逍遥の立場と一致しているのである。このことについては、「没理想論争注釈稿（一）」で述べた。

（10）**有無の境に迷ひて、有は即ち無、無は即ち有と観じつゝ、無神主義のユニテリヤンと化し去らんとせるなり。**・ユニテリアンは一神教徒。「没理想の語義を弁ず」に「理の差別を崇めざるもの何条万理の奴となるならん我主ははじめより平等（即ち唯一）なればなり。」とあり、ここでの「ユニテリヤン」もこれに相当すると思われる。「有は即ち無、無は即ち有と観じつゝ」というのは、はっきり理想を無としてしまうと、唯物論あるいは無神論に陥り、かといってはっきり理想を有としてしまうと、有であるからには、差別が生ずるわけで（無は、無であるから差別の生じようがない。）、そうすると様々な理想が生ずることになってしまい、結果的にそのどれかの理想に縛られてしまう。これを避けるには、「有は即ち無、無は即ち有と観」ずるしかない。そこで、理想の存在をはっきりと認める訳でもないが、認めない訳でもない「無神主義のユニテリヤン」という矛盾した言い方をしているわけである。

（11）**逍遥子が没理想は方便のみ、目的にあらず。**・「没理想の語義を弁ず」に「彼の造化に対して用ふると詩文に対して用ふるとの間に、本意に於て別を立てたり。造化に対しては、専ら方便の名目として是れを用ひ、詩文に対しては目的即ちドラマの本体の一面を代表する名として用ひたり。」とある。したがって、ここでは「造化に対して」

の意味で「逍遥子が没理想は方便のみ、目的にあらず」といっていることになる。つまり、宇宙の根本を支配している原理（大理想・没理想）を求めかねて、方便としての「没理想」の態度をとったのだというのである。二葉亭との一致については前述。なお、ここでの逍遥の発言は、鷗外が「世界はひとり実のみならず、また想のみちく〳〵たるあり。」（「早稲田文学の没理想」）を受けたものと考えられるが、これを契機として、形而上学的論争へと引き込まれて行くことになる。文芸批評についての論争という態度を堅持しようとすればできなくもなかっただろうに、このような発言をしたのは、逍遥自身にも、そうした問題に対する強い興味が既にあったことを示すものであろう。（『柿の蔕』で、逍遥は二葉亭の「理想家」としての性格に影響されたと回想している。）

（12）**彼れは一切空と観じたるにもあらず、本来虚無と観じたるにもあらず。**・「我れは敢て造化を指して絶対の意味にて理想無しとはいはず。また敢て絶対の意味にて無心なりともいはず。」（「没理想の語義を弁ず」）とある。

精覈の論[1]に答ふるに、漠然たる無辞[2]を以てす可からず。逍遥子が理想は浅薄浮泛なれども、流石にこゝに弁じ尽くすべきにあらねば、余はすべて他日に譲り、姑く筆をさしおき、先生が教へによりて更に談理の尊きを明かにし、口を開かざれば我が非を知るに由なきこと、併びに沈黙の頗る非なることを覚りたるを謝す。[1]

（1）**精覈の論**・詳しく考えの行き届いた論。
（2）**無辞**・粗雑な言葉、文章。
（3）**先生が教へによりて更に談理の尊さを明かにし、口を開かざれば我が非を知るに由なきこと、併びに沈黙の頗る非なることを覚りたるを謝す**・鷗外によって自己の論の非を教えられたのは、取りもなおさず「談理」の効果であるとしたもの。鷗外の論難そのものを「談理」と規定しているわけで、低姿勢な物言いの中に、ひそやかな皮肉が感じられなくもない。

## 没理想の語義を弁ず[1]

両義の語を用ふるは、論理の失とする所にして[2]、用語例を明かにせずして、浪りに語を造るは、談理の病ひとする所なり[3]。我が没理想の説を唱ふるや、実に此の失と病ひとに中れりき。『しがらみ艸紙』なる烏有先生なかりせば、我れ長く此の弊を覚らざりしならん。こゝに先生が賜を謝し、あらためて没理想の弁を作る。

（1）**没理想の語義を弁ず**・『早稲田文学』八号（明治二五・一）「時文評論」欄に掲載。「烏有先生に謝す」の内容を詳しく述べたもの。「早稲田文学の没理想」を受けて、「没理想」の語義を説いたもの。のち『文学その折々』に収録。

（2）**両義の語を用ふるは、論理の失とする所にして**・「シェークスピヤ脚本評注」で「造化」に対して「没理想」といった時と「詩文」に対して「没理想」といった時とでは意味にずれがあったにもかかわらず、一つの「没理想」という語に二つの意味を担わせてしまった、という反省の弁。後述。ただし、鷗外は「早稲田文学の没理想」では「没理想」は、「没理想」ではなく、「没主観」、「没挿評」、「没類想」、「没成心」の四つの意味で使われていると、批判している。

（3）**用語例を明かにせずして、浪りに語を造るは、談理の病ひとする所なり**。・「没理想」という語は、逍遥の造語である。にもかかわらず、具体的用例を挙げて語義を定義しなかったために、鷗外のような誤解を招いてしまったのだ、という反省。

我が謂ふ没理想は、没却理想または不見理想[1]の両義を含めり。之れを無理想の義に解しても差支へなけれど、我が旨は理想絶無、本来無理想といふとはおのづから別あり[2]。而して彼の造化に対して用ふると詩文に対して用ふるとの間に、本意に於て別を立てたり。造化に対しては、専ら方便の名目として是れを用ひ[3]、詩文に対しては

目的即ちドラマの本体の一面を代表する名として用ひたり。[4] 其の理を、皮を除き、肉を去りて、最も簡明に弁析せん。

（1）**没却理想または不見理想**・「理想」は神の世界創造に際しての設計図、もしくは、世界を支配している根本原理のようなものを考えてよかろう。造化に対しては、その「理想」が、さまざまな現象の陰に隠れて解釈できないようなものであることをいう。たとえば、ヘーゲルであるなら、「理想」は合目的に発展展開する神のイデーであり、ショーペンハウアーであるなら、「理想」は盲目の生への意志であるということになるが、逍遥は、そのように人知によって解釈し、規定することのできぬもの、逆にいえば、あらゆる解釈を可能にするものであるとしたのである。つまり、造化に対しては、あらゆる人間の「理想」を呑み込んでしまうような、「没却理想」とされた。同じように、詩文でも、作者の作為が現われていない（不見）ということになるわけで、解釈し、規定できぬようなものであることを指す。

（2）**之れを無理想の義に解しても差支へなけれど、我が旨は理想絶無、本来無理想といふとはおのづから別あり。**・造物主の「理想」は、隠れており、現われていないのだから、その限りでは、無理想という意味にとっても悪くはないが、「理想」が全くない、もともと理想がないというつもりで使ったのではない。（1）参照。

（3）**造化に対しては、専ら方便の名目として是を用ひ**・「造化の本体は無心なるべし」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）と、必ずしも「専ら方便の名目として」いたとは言いがたい（傍点筆者）用例もあるが、これは「如是憎愛無しの義にて、人間と同じ心は無かるべしといふ義なり」と弁明している（後述）。逍遥は、まず「造化」の本体を「没理想」（大理想）と規定し（ただし、「没理想」であるから、形式的には規定しながらも、実質的な規定は避けている。存在するだろうと仮想はされるが、内容は規定できないからである。）、次に、その「没理想」に達するために、悟りにも似た「没理想」の境地を求めることを主張した。これが「方便」である。

（4）**詩文に対しては目的即ちドラマの本体の一面を代表する名として用ひたり。**・逍遥は、優れた作者による戯曲の創作を、神の天地創造のアナロジーで捉えている。造物主が天地を創造する際、「無心」（没理想）で万物を創造した結果、「造化」が生まれた、のと同じように、作者が「無心（没理想）」で創作するなら、「造化」に限りなく近い文学作品ができるに違いない。このように考えた。そして、その結果現われた「造化」の写し絵のような文学作品

の姿をも「没理想」と呼んだ。文学作品は、すべからく結果としての「没理想」を目指すべきであると考えたのであって、それゆえ「目的」ということになる。したがって、「造化」に対しては「方便」、「詩文」に対しては「目的」ということになり、「没理想」は、両義の語となる。しかし、実際は、①造化もしくは文学作品を創造する際の設計図。②その結果現われた「理想」の見えない「造化」もしくは文学作品の姿（ただし、逍遥の用例は、もっぱら文学作品についてである。）。の他に、③造物主の天地創造の時の境地、もしくは、優れた作者が創作を行なう際の境地。の意味をも持つようだ。いかにシェークスピアといえども、造物主の如き「理想」を持っていたはずはない。それにもかかわらず、「造化」の似姿の如き作品をものしたというのは、無心の境地で創作したからだろう、と考えた所以であろうが、無心の境地（③の「没理想」）においてこそ、世界の根源たる「イデー」（①の「没理想」）と一体化できるとの前提に立ったため、①と③とが結び付いたのだろう。逍遥は、①と③とを区別していないようである。

平生ひそかに思へらく、個々の小理想家もしくは今人の見て大理想家と做せる思索家が断じて造化の極致なりと定むる所、未だ必ずしも造化の極致にはあらざるべく、個々の庸人が見て造化の心なりと感ずる所も、またもとより造化の心ならじ。漠々たる大造化は古今の万理想を容れて（没却して）余りあり。[1]若し理想といふ語をもて今人が思議し得たる極致の名とせば、造化を名づけて没理想といふも不可なからん。没理想といふ語は、今人の衆理想を没却即ち埋没して、尚ほ余地ありといふ義に解せらるべければなり。[2]更に換言すれば、如是理想本来空の意なり。[3]夫れ然り、大思索家の理想すらも、尚ほ且つ造化を掩ひ尽くすこと能はず、況んや、庸人の心に思念する所は、悉皆大造化の無底無辺の洋中に没了して跡無しともいひつべし。然り、造化は（今人の智の及ぶ限りにていへば）無辺また無底なり。此の無底無辺のもの、これを名づけて何と呼ばん。大なる心と名づけんか。神存すといふにひとしからん。然れども我れ頑愚未だ神存すと信ずることを得ず。此に於てか右に角あり、左に角あり。仮に名づけて没理想といふ。[4]且つこれを釈して曰はく、古今の万理想、皆是なり、皆非なりと。[5]皆是なりとは、皆此の無限無底的の中に没すればなり。皆非なりとは、皆此の無限無底的を掩ひ尽くす能はざればなり。如何にせば此の無限無底の絶対に達すべきぞ。曰はく、我を去つて我を立てん。一理想を棄てゝ没理想を理想と

し、一理想を固執する欲有限の我を去つて、無限の絶対に達せんとするの欲無限の我を立てん。[6]その方便は如何。答ふらく、没理想と。我れ已に、没理想をもて我が理想とす。惟れ我が理想なり。こゝを以ての故に、無窮無限、無底無辺の大洋を渉る時の舟筏即ち方便に外ならず。懐疑、我れの如きもの、いかで軽々しく有無を断ぜんや。[7]我れは敢て造化を指して絶対の意味にて理想無しとはいはず。また敢て絶対の意味にて無心なりともいはず。[8]たま〳〵詩文を論ぜし時、造化無心といひしことあれど、そは如是憎愛無しの義にて、人間と同じ心は無かるべしといふ義なり。[9]人間以上の心なるもの若しあらば、造化或ひは是れを領有せん。我れ蒙昧未だ判ずる能はず。

（1）**個々の小理想家もしくは今人の見て大理想家と做せる思索家が断じて造化の極致なりと定むる所……**・漠々たる大造化は古今の万理想を容れて（没却して）余りあり。「シエークスピヤ脚本評註緒言」に「造化の作用を解釈するに、彼の宿命教の旨をもてするも解し得べく、また耶蘇教の旨をもてするも解し得べし。其の他、老、荘、揚、墨、儒、仏、若しくは古今東西の哲学が思ひ〳〵の見解も、之れをあてはめて強ち当たらざるにあらず。否、造化いふものは、是等無数の解釈を悉く容れても余りあるなり。」とある。

（2）**没理想といふ語は、今人の衆理想を没却即ち埋没して、尚ほ余地ありといふ義に解せらるべければなり。**・あらゆる理想を呑み込んでしまう理想という義。逍遥は「梅花詩集を読みて」（明治二四・三）で、「底を究む可らず」という文脈ではあるが、「底知らぬ湖」という比喩を使っている。直後の「大思索家の理想すらも、尚ほ且つ造化を掩ひ尽くすこと能はず、況んや、庸人の心に思念する所は、悉皆大造化の無底無辺の洋中に没了して跡無しともいひつべし」に対応する。

（3）**如是理想本来空の意なり**・造化の「理想」はあまりにも茫漠としていて究めがたく、あたかも存在しないが如くである。無いように見えるが、実は、存在するのだ、という方に力点がある。

（4）**造化は（今人の智の及ぶ限りにていへば）無辺又無底なり。此の無底無辺のもの、これを名づけて何と呼ばん。大なる心と名づけんか。……仮に名づけて没理想といふ**・この部分の逍遥の口吻は、「老子」の「物有り混成す。天地に先立ちて生ず。寂たり寥たり。独立して改めず。周行して殆ふからず。以て天下の母たるべし。吾其の名を知らず。之を字して道と曰ふ。強いて之が名を為して大と曰ふ。（はじめに混沌とした何者かがあった。それは天地の分かれる以前に生じていた。それは声もなく姿も無い存在であるが、他の何者にも頼らずに存立し、不変のも

のであり、万物にあまねく行き渡っていて、しかもおこたらない。これは天地万物を生み出したものなので天下の母と言うことができよう。私はそのものの名前を知らない。だからこれに字して道といい、強いてこれに名づけて大と言うのである。」を思わせる。老子の影響は、この部分だけではなく、「没理想の語義を弁ず」を中心に、逍遥の没理想論全体に感じられる。鷗外は、こうした点にも強く反発した。（坂井健「坪内逍遥「没理想論」と老荘思想」（『稿本近代文学』一三号、一九八九・一一）

（5）**これを釈して曰はく、古今の万理想、皆是なり、皆非なりと。**・以下述べられるように、古今東西の哲学思想も、すべて造化に当てはめることができるから、「皆是」なのであり、また、造化をすべて説明し尽くすことはできないから、「皆非」ということになるのだが、こうすると相反する事象が同時に成立することになる。このように、無限の絶対において矛盾律を無視するのが、没理想論の一つの特徴であるが、こうした態度は、後に鷗外によって激しく非難されることになる。「こゝ顕象世界の法廷にありて裁判をなさむとするものあり。又此顕象世界の文壇にありて批評をなさむとするものあり。その宣告、その評論は縦令絶対の上よりしても実相を撥無すべからず。盗む者と盗まるゝ者と、みな是なり、皆非なりといひてはおそらく裁判にはなるべからず。論理を守るものと、守らざるにものと、皆是なり、皆非なりといひてはおそらく批評にはなるべからず。」（「早稲田文学の没却理想」明治二五・三）

（6）**如何にせば此の無限無底の絶対に達すべきぞ。曰はく、我を去って我を立てん。一理想を棄てゝ没理想を理想とし、一理想を固執する欲有限の我を去って、無限の絶対に達せんとするの欲無限の我を立てん。**・この部分は、有差別の現象世界に執着しようとする「念」を滅却することによって、人知を絶した無差別の本質的存在と一体化し「真理」を体得できると考えた二葉亭の論に酷似している。前述。

（7）**懐疑、我れの如きもの、いかで軽々しく有無を断ぜんや**・逍遥は、後に懐疑的な理想家二葉亭の影響を受けたと回想している。（『柿の蔕』）

（8）**我れは敢て造化を指して絶対の意味にて理想無しとはいはず。また敢て絶対の意味にて無心なりともいはず。**・「没理想」を「無理想」であると受けとめた鷗外が「世界はひとり実のみならず、また想のみち〳〵たるあり」（「早稲田文学の没理想」）と、批判したのに対する弁明。

（9）**たま〳〵詩文を論ぜし時、造化無心といひしことあれど、そは如是憎愛無しの義にて、人間と同じ心は無かるべしといふ義なり。**・「人々試みに自然といふものを観よ。心を虚平にして観れば、自然は只〻自然にして、善悪のい

づれにも偏りたりとは見えず。固より意地悪き継母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。」（「シエークスピヤ脚本評註緒言」）を指す。

汝、没理想をもて理想とせば、汝、恐らくは、万理想の敵とならざるを得ざるべし、万理想皆非なりと信ずるが故に[1]。また万理想の奴とならざるを得ざるべし、万理想皆是なりと信ずるが故に[2]。而して若し其の孰れかを択ばずば、進退窮谷し、中有に彷徨して身を終ふるまで前むこと能はざらんと[3]。

（1）**汝、没理想をもて理想とせば、汝、恐らくは、万理想の敵とならざるを得ざるべし、万理想皆非なりと信ずるが故に。**・「没理想」は、存在が仮想されてはいるが、規定できないものとされている。前述。したがって、他のいかなる理想とも対立しない。ところが、これを一つの理想として規定したならば、必然的にそこには内容の差異が生じ、他の理想との対立が生まれる。しかも、他のいかなる理想を選んだとしても、それは決して「造化」を説明し尽くすことはできないから、そこに解決はない。必ず「万理想の敵」となる結果に終わる。汝は一般的に人を示す。

（2）**また万理想の奴とならざるを得ざるべし、万理想皆是なりと信ずるが故に。**・いかなる理想をとっても、「造化」に当てはめることは可能なのだから、どの理想も否定しさることはできない。そうすると「万理想の奴」となることになる。

（3）**若し其の孰れかを択ばずば、進退窮谷し、中有に彷徨して身を終ふるまで前むこと能はざらんと。**・もし「没理想」を「理想」としてしまったならば、「万理想の敵」となるか「奴」となるか、そのどちらも選ばないとすれば、「中有に彷徨」うしかない。この三つの選択すべてに救いはない訳で、この原因を尋ねると、「没理想」を一つの「理想」として規定してしまったことになる。だから、「理想」ではなく、「没理想」でなければならない、という論理。文末の「と」は、前の「平生ひそかに思えらく」からの続き。

答ふらく、没理想とは平等理想と云ふに同じ[1]。我は万理想の中に就いて、其差別を捨て、平等の理を探らんとするなり。相の差別に泥まざるもの、天上天下、何れの処にか敵を作らん。万理想の平等なる所は、皆我が友

なればなり。理の差別を崇めざるもの何条万理の奴とならん。[2] 我が主は初めより平等（即ち唯一）なればなり。[3] 夫れ没理想をもて理想とすといふは、無主義といふことゝ殊なり。已に主義あれば信あり、信あれば我あり。已に我あり、そが信ずる所、我が住かんとする所なり。前まざらんやは。我は「欲無限」と歌ひて「絶対」を尋ね、「没理想」を理想として「大理想」を求めんとす。[4] 何者の為に欲無限と歌ふか。我が為にか。衆我の為にか。今は説くべき要なければいはず。これを造化に対して没理想といふ語を用ふる由縁とす。

（1）**没理想とは平等理想と云ふに同じ。**―理想を固執する欲有限の我を去って、無限の絶対に達せんとするの欲無限の我を立てん」とあるように、有差別の有限世界を超えた、無限の絶対の、いかなる差別も存在しないような世界を想定しているわけで、当然「没理想」は「平等理想」ということになる。これに対して、鷗外は「悪平等」と断じている。（「早稲田文学の没却理想」）

（2）**理の差別を崇めざるもの何条万理の奴とならん。**・有限の人間の智恵によって規定されるような、「理」による差別を否定し、無の境地を求めた訳だが、このように「理」を軽視する姿勢は、鷗外の批判するところとなる（「早稲田文学の没却理想」）。前述。

（3）**我が主は初めより平等（即ち唯一）なればなり。**―烏有先生に謝す」の「無神主義のユニテリヤンと化し去らんとせるなり。」に対応すると思われる。前述。

（4）**我は「欲無限」と歌ひて「絶対」を尋ね、「没理想」を理想として「大理想」を求めんとす。**・有限で相対的な人間の智の及ぶ世界に対する執着を棄て、無限の世界を求めて、世界の究極たる「絶対」を尋ね、「没理想」という方便によって「大理想」を悟ろうというもの。こうした態度を鷗外は、「早稲田文学の没却理想」で「逍遥子は豈釈迦と共に法華涅槃の経を説いて、有に非ず、空に非ず、亦有、亦空といはむとするか。」と非難している。

詩文に対して没理想といふ語を用ふるにも、其の義は同じ。作家没却して見えずといふ義なり。[1] 必ずしも作家に理想無しといふ意には非ず。[2] 此段大むねは、造化に対していふ時と異なることなけれど、聊か差あり。例へば、シエークスピヤを没理想といふは、もちろん無理想の意にはあらねど、さりとて人間以上の理想もしくは大

理想ありとの義にもあらず。[3] 多数の批評家が彼れの理想なりとする所のものは、彼れの理想にあらず、彼れが理想は見ること難しの意なり。[4] さればドラマを没理想といふは、ドラマの本体を説きたるにあらで、寧ろ其の客観を評したる詞とも見るべし。[5] 我れ以為へらく、ドラマは活きたる差別相と活きたる平等相とを兼ねたるものなりと。我が謂ふ活きたる差別相とは、個々の人物、おの〳〵その特質を有し、作家の性情を脱離して云為するをいふ。[6] 活きたる平等相とは、取りも直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて、作家の性情を脱離すといふことに外ならず。即ち没理想なり。作家の性情見る能はずの意なり。[7] 人間を支配すべき因縁果報の理法の一貫するを見れども、絶えて作家の小天地を現ぜずとの意なり。[8] これを換言すれば、作家能く自己を脱離して個々差別の人物を描けるものが即ちドラマなり、といふ義なり。自己を脱離す、故に自己が理想をもて人物が運命を左右すること無し。[9] 此故に、上乗のドラマを名づけて、没理想といふ。此の活きたる差別相即ち活きたる平等相の中に、衆批評家の理想を没却するのみならず、作家自身の理想をも没却すればなり。[10] 尚ほ的切にいへば、此の差別相の裏面なる平等相を名づけて没理想といふなり。我れ嘗て（『早文』前号誌上）、シエークスピヤを評せし時、只〻単に此の一面を挙げて他の一面に説き及ぼさゞりしは、当時はドラマの全局を評すべき要なかりしが故なり。[11] シエークスピヤを評註するに当りて、理想的解釈[12]を下すことの、大むね読者を益せざるのみか、其の人の解釈妄なる時は、シエークスピヤの本文をも併せ残はんを恐るとのみ説きしが故なり。本文もまたドラマの全豹を説き尽くさず、こゝには只没理想の語義を弁ずるに必要なる部分のみをいへり。読者これを諒せよ。

（1）**作家没却して見えずといふ義なり**・作家の作意が作品の中に現われていない。

（2）**必ずしも作家に理想無しといふ意には非ず**・作家が、作品を作る際に、作意を持っていなかったという訳でない。持っていた、いないの問題ではなく、それが現われているか、否かを問題としているのである。

（3）**シエークスピヤを没理想といふは、もちろん無理想の意にはあらねど、さりとて人間以上の理想もしくは大理想ありとの義にもあらず**・シエークスピアを没理想というのは、作者に作意がないという意味ではない（作意の存在し

ない創作など有り得ないから、当然である。)が、人間以上の大きな「理想」をもっているという意味でもない(シェークスピアといえども、神ではないのだから)。

(4) **多数の批評家が彼れの理想なりとする所のものは、彼れの理想にあらず、彼れの理想は見ること難しの意なり・**逍遥の没理想論が、シェークスピアの戯曲理解に関わって成立したものであることはいうまでもない。シェークスピアの戯曲を紹介しようとする逍遥が、それについての解釈が、しかも、彼の杖とすべきイギリスの先学の解釈が、実に多様であるという現実に対し、現実的かつ良心的に対応しようとした際の、暫定的なものとしての性格を持っているが、その結果、解釈を留保しようとすることになる。

(5) **ドラマを没理想といふは、ドラマの本体を説きたるにあらで、寧ろ其の客観を評したる詞とも見るべし・**「ドラマの本体」は、文脈上作意ととれる。文学作品が「没理想」というのは、作意がないというのではなく、創作された作品に作意が現われていないこと(客観)をいう。

(6) **我が謂ふ活きたる差別相とは、個々の人物、おの〳〵その特質を有し、作家の性情を脱離して云為するをいふ。・**一般に、作家の創り出す人物は、多かれ少なかれ作家の分身であるから、作家の性格を引きずっていることが多く、従って、類型的となる傾きがあるが、そうした弊害を一切持たず(この「差別相」は、創作された作品の姿を示す。)、活きた人物の如く個性をもって活動しているということ。

(7) **活きたる平等相とは、取りも直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて、作家の性情を脱離すといふことに外ならず。即ち没理想なり。作家の性情見る能はずの意なり。**・「活きたる差別相」を作り出すためには、「活きたる平等相」が必要であるということ。「平等相」は「差別相」に対して、そうした作品を生み出すべき作意を形容する。

(8) **人間を支配すべき因縁果報の理法の一貫するを見れども、絶えて作家の小天地を現ぜずとの意なり・**すでに『小説神髄』に「造物主ハ天地を造りて私なし怜も我党小説作者が種々の人物を仮作りいだして毫末も偏頗愛憎なく行住進退なべてひたすら自然に戻らぬやう写しなせるに似たりといふべしさもあらバあれ造化の翁が造り放したる活世界ハ極めて広大無辺にして規模のあまりに大なるから凡庸稚蒙の眼を以ては原因結果の関係をバ察り得ることいと〳〵難かりしかるを我党小説作者が其因果の理の要を摘みて一小冊子のうちに蔵めて点検取捨する便に供ふ」といった言がある。なお、「人間を支配すべき因縁果報の理法」は、見えている訳で、したがって無理想という訳ではない。畧外にいわせると、これは「小天地想」が現われているからだ、ということになる。ちなみに、逍遥のい

う「小天地」は否定的意味合いで、鷗外のいう「小天地想」と正反対である。

（9）**自己を脱離す、故に自己が理想をもて人物が運命を左右すること無し。**・作家が、ある登場人物に思い入れをすれば、その人生観にしたがって、登場人物の運命を左右することになる。たとえば、勧善懲悪の作品を念頭に置けば分かり易い。『小説神髄』以来の逍遥の写実論とのつながりが強く感じられる。

（10）**此故に、上乗のドラマを名づけて没理想といふ。此の活きたる差別相即ち活きたる平等相の中に、衆批評家の理想を没却するのみならず、作家自身の理想をも没却すればなり。**・すぐれたドラマでは、登場人物は個性を持って生き生きと活動し、作家は自身の人生観によって、人物の運命を左右しようとしない。そのため、作品はさながらミクロコスモスの様相を呈し、様々な批評家の解釈も受け入れ、作家の作意も見えないようになっている。これを没理想というの意。

（11）**我れ嘗て（『早文』前号誌上）、シエークスピヤを評せし時、只〻単に此の一面を挙げて他の一面に説き及ぼさゞりしは**・只〻単に此の一面を挙げて他の一面に説き及ぼさゞりしは、当時はドラマの全局を評すべき要なかりしが故なり。該当号（『早稲田文学』七号）に相当する論評なし。初出では「我れ本誌第一号にて、シエークスピヤを評せし時、只単に此の一面を挙げて……」。つまり、『シエークスピヤ脚本評註緒言』を指している。特に、「若しシエークスピヤを称美せんとせば、其の人間の性情を活動せしむる技両を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし、唯〻其の理想をほめて、大哲学者の如く高しといふは信け難し。むしろ、没理想なるをたゝふべきなり。」を受け、「此の一面」は「差別相」、「彼の一面」は「平等相」を指し、「差別相」は「ドラマの一面」に、「平等相」は「ドラマの本体」に相当すると思われるから、『早稲田文学』一号では、もっぱらシェークスピア戯曲の客観的な姿を問題にしたので、作家の「没理想」には触れる必要がなく、また説明もしなかったので、無理想と曲解されたのだろうという弁明の気持ちを含む。

（12）理想的解釈・作意・主題についての解釈

要するに、造化に対していふ没理想は方便にして、我が理想のドラマに対していふ時は、目的なり。ドラマの本体の一面をいふなり。以上を没理想の略とす。

鷗外漁史が精覈なる駁論に対しては、我が非を覚りたることの由も、我が未だ服し得ざる条々も、我が文の拙

きが為に、漁史をして誤り解せしめしかと思はるゝあたりも、皆次々の号にて答ふべし。[1]こゝには只用語の義を弁ずるのみ。

（1）**鷗外漁史が精確なる駁論に対しては……皆次々の号にて答ふべし。**・次号（『早稲田文学』九号、明治二五・二）には、「小羊子が白日夢」が掲載され、「烏有先生に答ふ」の連載が始まる（一〇号まで）。また、一〇号には、「其の意は違へり」が書かれた。

（未完）

付記　本稿は、平成四年度筑波大学学内プロジェクトの助成による成果の一部である。